

愛の讃歌～小さな雀

この秋、私の好きな歌手、エディット・ピアフの映画が公開されます。またカラオケに歌いに行っちゃおうっと。

原題は「La Môme」～ちっちゃな女の子となっていました（英語版のタイトルは「La Vie En Rose」、日本語版は歌の邦題と同じ「愛の讃歌」）。「la môme piau」で小雀、「Piau」って雀のことで彼女の名前そこからついたんですね。初めて知りました。

フランスでは今年2月に公開、12人に1人が観た計算になる（480万人）ヒット作です。（2007年8月4日）

京都で合コン

京都にやって来ました。ひとり旅京都です。初めてのところをいくつかぶらぶらと。お客さまも一緒になく、時間にも追われずというのは嬉しいね。

昨日午後は京都国立博物館。恥ずかしながら初めて。東京の国立博物館と比べてこぢんまりとしていて威圧感がないのがよいね。俵屋宗達の絵と本阿弥光悦の書がコラボした「鶴岡下絵和歌巻」がよかったです。

今日午前は西芳寺。写経をすると聞いていたので気合いを入れて出かけたけど、「般若心経」は読経のみでちょっと肩すかし。木の板（護摩木）に筆で自分の願いごとを書くだけでした。苔がピロードのように広がる庭を見て、この前DVDで観た『風の谷のナウシカ』の腐海を思い浮かべました。

午後は北山の京都府立陶板名画の庭へ。安藤忠雄の設計。この前お客さまが見たいと言っていたので興味があって。庭は意外と狭かった。「最後の審判」を太陽光の下でゆっくり見ることができてよかったです。

京都もだんだん地図なしで歩けるようになってきた。今までは観光のポイントを動かだけだったのが、点から線へ、線から面へ。この段階になると町歩きがグンと楽しくなってくる感じ。

さて、昨晩はmixiのラメールさんのお計らいにより、鴨川が見える隠れ家風居酒屋へ。業界の先輩方も顔を出されて男3女3の合コンスタイ

ル。日本人の起源についてとか外国では虹の色は何色かとか、愛人を連れてきた有名アーティストの話とか、縦横無尽に話は飛んで大盛り上がり。そう、みんな話題豊富なガイドさんなのでした。

その後、祇園のバーに連れていってもらいました。こういうところはよそ者には敷居が高いですね。誰かに教えてもらわないと。いいところに来てよかった。楽しい夕べをありがとうございました。

(2007年9月7日)

ラメール 帰りに、たまたま乗ったタクシーがヤサカタクシーさんで、ロゴマークの三つ葉のクローバーが四つ葉のクローバーだと乗車して判明。確率は1200台分の4台です！ 乗車記念カードもゲットしましたね。これがTomoさんの京都の旅の最大の収穫ですよ！

カラオケでフランス語

一昨日はタヒチアンたち8人と品川でカラオケに行きました。今年4回目のフレンチ・カラオケ・ナイト。

タヒチの人はもともと歌好きだけあって、盛り上がった～。1時間半を30分延長してしまいました。

カラオケでのパターンもだんだんかたまってきた、

- 1) まず自分で「愛の讃歌」を歌い、見本を示す。
- 2) カラオケにあるフランス語の曲をどんどん入力し、歌ってもらう。オールディーズばかりなのに、意外とみんな知ってる。
- 3) そのうち、クロード・フランソワない？ とか言い出すので、検索のやり方を教え、やってもらう。しばらくするとあんまりないのがわかって、あきらめる。
- 4) マドンナの「ラ・イスラ・ボニータ」とかフランク・シナトラの「マイ・ウェイ」を歌い、英語の歌もあるよ、という。
- 5) お客さまに英語の歌をいくつかトライしてもらう。意外と難しいとわかって、あきらめる。
- 6) 1)～5)の間に(少しだけ)日本語の歌を歌って、勝手に自分だけ楽しむ。
- 7) 最初のほうに歌ったフランス語の歌でウケがよかったものを全員

で数曲絶唱して、終了。

ところで、どんなフランス語の歌があるかという、ほぼどこでもあるものが、

La vie en rose: Edith Piaf, 1946 (バラ色の人生)

Hymne à l'amour: Edith Piaf, 1950 (愛の讃歌)

La plus belle pour aller danser: Sylvie Vartan, 1964 (アイドルを探せ)

Poupée de cir, poupée de son: France Gall, 1965 (夢見るシャンソン人形)

Irrésistiblement: Sylvie Vartan, 1968 (あなたのとりこ)

Comment te dire adieu: Françoise Hardy, 1968 (さよならを教える)

Tout tout pour ma chérie: Michel Polnaref, 1969 (シェリーに口づけ)

Les Champs-Élysées: Danielle Vidal (Joe Dassin), 1969 (オーシャンゼリゼ)

T'en va pas: Elsa, 1986 (悲しみのアダージョ)

Pour un flirt: Michel Delpech, 1970 (青春に乾杯)
ケースバイケースが、

Les feuilles mortes: Yves Montand, 1946 (枯葉)

Ma solitude: George Moustaki, 1969 (私の孤独)

L'aquoiboniste: Jane Birkin, 1977 (無造作紳士)

Il me dit que je suis belle: Patricia Kaas, 1993 (はかない愛だとしても)

タイトルの日本語訳が今になってみるとばかばかしくて笑える。オーシャンゼリゼなんて、オーはほんとは間投詞じゃなくて前置詞だし。

どの曲がカラオケにあるかないかは、カラオケに行かなくてもサイトから検索できます。

第一興商(ビッグエコー)のダム

<http://www.clubdam.com/>

歌広場、カラオケ館のUGA

<http://ugakara.com/pc/>

シャンソンの歴史については、最近出た蒲田耕二さんの『聴かせてよ愛の歌を』という本が、参考になります。(2007年9月15日)

マイ・マイク

春にバスのマイクが壊れて痛い目にあっただけで自分のマイクを購入しました。audio-technicaの一番安い「AT-VD3」、2,000円くらいでした。audio-technicaは専門メーカー。いろいろ高いのも出てるけど、性能の違いは拾う音域の違いなので、これで十分とのこと。「包丁一本さらしに巻いて〜♪」ならぬ「マイク1本ジャックにさして〜」。使い心地はなかなかよいです。それに清潔な感じがするし。(2007年9月20日)

水に流して(私は後悔しない)

今日は映画の日。1,000円で『エディット・ピアフ〜愛の讃歌〜』を観に行きました。感動。3回くらい泣いちゃいました。一人で行ってよかった。最近観た『酔いどれ詩人になるまえに』(マツ・ディロン主演)、『プロヴァンスの贈りもの』(リドリー・スコット監督、ラッセル・クロウ主演)の中ではいちばんかな〜。おすすめです。

とにかく、昔歌おうと思って口ずさんだこともある知っている曲が次々出てくるのがよい。これはフランス人も同じだと思います。美空ひばりのようなものですかね(笑)。それから、歌詞の内容が、ピアフがほんとに生きている瞬間の喜びや悲しみと重なりあって心に響いてくる。フランス語わからない人には申し訳ないけど、ほんと、フランス語勉強してよかったです。

で、圧巻は最後の「水に流して」。

«Non, rien de rien, Non, je ne regrette rien.....je repars à zéro...»

これはむかしドーナツ盤買ったとき「愛の讃歌」のB面だったので、そらで歌える(なのにカラオケにない)。過去との訣別、ゼロからのスタートを高らかに謳いあげています。このハイライトの瞬間を大団円をもってくるとは。

ところで、この映画の〈ズルい〉ところは、ピアフの人生の時間軸を行ったりきたりして交差させ、(私もだけど)ピアフの人生についてある程度の知識を持ってるふつうのフランス人に、頭の中で再構成しながら観る

という作業を強いるところ。いかにもフランス人が考えそうな人生ゲームのようなものですね。ま、まったく知識のない人もそれなりに楽しめると思うけど、ちょっとつらいかもしれません。

たとえばボクサーの愛人が飛行機で着いた時のシーン。ちょっと知識を持っていただけに私は「え、そうだったの」と完全にだまされてしまいました。くやしい(笑)。そのあとのシーンでは、もちろん涙、涙。ただ、「愛の讃歌」は、悲劇を知った時にも歌い続けた歌だと勘違いしてた。その後に創唱された歌なんですね。

もう一カ所、ジーンときたのは、マレーネ・デートリヒと出会うところ。デートリヒのセリフも泣かせるけど、うぶな感じを絶妙に表現したピアフ役のマリオン・コティヤール Marion Cotillard の演技がよかったです。

あと、個人的な思い出になりますが、オランピア劇場のようすも懐かしかった。ここは絶頂に上りつめたアーティストがリサイタルをやるころなんですよ〜。

ボクサー役のジャン＝ピエール・マルタンズ Jean-Pierre Martins はちょっとインテリで上品すぎるね。もっと野性的な男をイメージしてた。意図しての演出なのかな〜。

後でパンフレットを読んだらこの主役のマリオン・コティヤールは『プロヴァンスの贈りもの』でレストランの女性を演じていました。全然気がつかなかった。こんなに違うイメージの役作りできるなんて、すごい女優さんですね。(2007年10月1日)

Tomo 後ほどフランスにこの映画のDVDを注文しました。フランスのDVDは著作権ゾーンは日本と同じくZONE2なので視聴可能ですが、出力方式がNTSCでなくPALなので、ふつうのDVDプレーヤーとテレビの組み合わせでは視聴できないことが多く、私はもっぱらパソコンで観ています。

この『愛の讃歌』フランス語版の字幕は、英語の字幕と耳の悪い人用のフランス語の字幕があって(DVDによって字幕の言語は違います)、私は映画館で観た時はドパルデュエの台詞以外はあまり聞きとれなかったのですが、このフランス語字幕を観ながらだと、けっこうわかりました。昔はフランス語を勉強する手段があまりなくて同じ映画を観に何度も映画館に通ったりしたのですが、このごろは便利になりました……。

(12月17日)

秋の巡業スタート

明日からフランス人のグループのガイドさんです。ありがたいことにフランス人観光客の来日ブームは続いていて、秋のシーズンも商売繁盛。去年約100日だったガイドとしての就業日数が、今年は170日くらいに伸びそうです。それでも2日に1回か。でも1週間とか比較的長いツアーもあるので体力的にはこれで限界。オフシーズンには仕事あまりないし。

とりえずフランス語ガイド界の「ダンディ坂野」を目指します。その心は、超売れっ子のち消滅、ってそれじゃ困るか(笑)。

今回はアルザス地方の人たち。成田～東京～伊勢～大阪～広島～姫路～京都～奈良～箱根～鎌倉～東京～成田の10日間です。去年もアルザス地方の人たちを1回やったんだけど、その時、こんなことを言っていました。「南仏人は明るそうに見えるけど、それは表面的なのさ。アルザス人こそハートが温かい。寒いところだからなかなかドアを開かないけれど、いったん開いたら心よく迎え入れるんだ」と。

去年のアルザスのグループからは最後にアルザスの陶器のピアマグやアルザスのワインを頂戴し、そんなに感謝を示していただいたということもだけど、旅の終わりまでそんな重いものを持ち歩いてきたということのほうに驚かされました(笑)。今年もうまくいきますように～。

(2007年10月9日)

ラメール なかなか含蓄のある詩的な表現をしますね。フランス人もパリの人と地方では、かなり違う気がします。それにしても、日本人にはお金のチップだと失礼に当たると思うのか(そんなことありません!)、物を色々くれますよね。結構重かったり、かさばったり……。

東名工事の呪い

関西からの帰りも見事に東名工事に引っかかってしまいました(泣)。芦の湖の遊覧船は伊豆箱根汽船の最終には間に合わずに海賊船の最終に滑り込み。暗くなっちゃって大涌谷とロープウェイは翌日まわし(この決断は昼ごろにはしました)。河口湖のホテルのレストランでの朝食は早

すぎて無理になるので、ボックスにしてもらって出発。桃源台のロープウェイは朝早すぎてやってないので、バスで先に大涌谷に上がって帰りをロープウェイに。大涌谷の開門8時半と同時に入ったけど、黒タマゴは9時からということでまだ店が開いていませんでした。大涌谷から桃源台にロープウェイで降りて箱根新道から鎌倉へ(普通だと河口湖から東名回りでいくところですよ)。やっと鎌倉でスケジュールに追いついて時間通りのランチ。やった～。大涌谷では黒タマゴは無理だったけど、雲が切れて富士山もちょっと見えた。朝の大涌谷、すがすがしくていいですよ。

しかし、いったん旅程が崩れ出して、次々とぼろぼろになっていくさまは、見事なくらいです(笑)。立て直そうと思っても、打つ手も後手後手に回って。弱い野球チームの負け試合ってこんな感じなんじゃないかね。ちょっとグチでした……。明日は早朝、築地市場です。

(2007年10月18日)

しま 東名高速の集中工事は、ぼくも先日、静岡県島田市から東京に行くとき多少引っかけました。東京に入ってから観光だったのですが、団長に了解を得て、訪問箇所を1つ(皇居)削って、つじつまを合わせました。バスは18時まで解放してあげるのが絶対条件だったので。

Tomo そうなんですよ。削ればいいんですよ。気が弱いもので、それがなかなかできなくて(笑)。海外添乗では訪問箇所をはしよるのは御法度でしたから……。

アルザス小唄

アルザス人たちはけっこうお国自慢で、私がアルザスの白ワインの名前をいろいろと挙げたら喜んでいました。それから、アルザスのミネラル・ウォーターは「ヴァトヴィレール」«Wattwiller»。これが横浜の大黒PA(パーキングエリア)の売店で売られていて、「これアルザスの水だよ」と何人も買ってわざわざ私のところに見せにくる。これはけっこう可愛いですね。

また、お台場に自由の女神像が立っていますが、そのもとのパリの女神像の作者バルトルディ Frédéric Auguste Bartholdi は、アルザスのコルマル Colmar 出身なんですよ。いろいろと教えられる。

あと、とにかく声が大きい。今回の人たちだけなのかわかりませんが、いつも大声でベチャクチャしゃべってる。おかげでガイド席で居眠りもできませんでした(笑)。そして、アルザス地方の歌を何度も歌って盛り上がっていました。歌詞はアルザス方言でさっぱりわからないけど、「ハンシンシュノークラフ……」という出だしで、私がそれを言っただけで喜んで歌いはじめる。ノリのいい人たちです。(2007年10月21日)

Mizumizu あ、アルザス人の郷土愛、わかります! 昨日まで私がご一緒した21人の中にも、4名アルザス人がいらっしやいました~! アルザスをレンタカーで旅行したことがあると言ったら、すごく喜んでどこに行ったの? とか矢継ぎ早に質問が飛んできました。鎌倉の鳩サブレのお店では、クグロフがあるのを発見するやいなや私をつかまえて、「クグロフがあるよ。あれに、ゲヴェルトラミネールがあれば最高だよ」と言うので、「私そのワイン大好きなんです(ほんとうです)」と言ったら、これまたすごく喜んでいました~。

Tomoto その後、このアルザスの歌の歌詞を送ってもらいました。アルザスの歌を知ってるよ、といって最初だけでも口ずさむと、お客さまにウケるので、やってみてください。最初の部分だけ再録します(右側がフランス語訳)。

Dr Hàns im Schnockeloch	Le Jean dans le trou à moustiques
Hett àlles wàs er will	A tout ce qu'il veut
Un wàs er hett,	Et ce qu'il a,
Dàs will er nitt,	Il n'en veut pas,
Un wàs er will,	Et ce qu'il veut,
Dàs hett er nitt.	Il ne l'a pas.

Dr Hàns im Schnockeloch	Le Jean dans le trou à moustiques
Hett àlles wàs er will.	A tout ce qu'il veut.

私は「阪神、シュノークラフ」と覚えています。

ガイドの評価

20日に終わった10日間の41人のアルザス人たちの日本観光ツアーですが、お客さまへのアンケートがありました。「ツアーは現場で起こって

るんだ~!」、アンケートなんかでは旅の満足度を計れるものではないというのが私の持論ですが、このエージェントの国内ガイドングでは初めてだったので、お客さまがどう感じているのか、けっこう興味津々で、「匿名も可、各項目の段階評価のほかになるべくコメントを書いてね」と付け加えて、書いてもらいました。

やっぱり気になるのはガイドの評価のコーナー。「Prestation」(ガイドング力)、「Aimabilité」(感じのよさ)、「Disponibilité」(使える奴かどうか)、「Langue」(言語能力)、「Professionalisme」(プロ意識)、「Efficacité」(要領のよさ)の項目があり、それぞれ「Bon」(良い)、「Moyen」(普通)、「Mauvais」(悪い)の3段階。ほぼ全員回収した中で(紙をなくしたマダムが1人。2人で1枚書いたカップルが3組で計37枚)、全項目全員が「良い」で、これは3段階評価だからまあ当たり前かな(エヘン)。段階チェックのほかに、私への特別な書き込みをしてくれた人が16人で(「笑顔が素敵」etc)、こんなところでしょうか。これくらいは書き込みないとね。アンケート用紙の裏側までいっぱい感想を書いてくれた人がいて、これにはなんかゾーンとききました。こんなに感動して旅してたんだなーって(涙)。

あと、日本酒をくれた方が3人いました。わざわざどこかで私のために買って、それをくださるのだからありがたいことですが、もっとワインが好きって言ってあげればよかった。

ガイドとしては旅自体の評価も上げなければいけないわけですが、旅についても4項目があって、「良い」にチェックが138、「普通」にチェックが10、「悪い」はゼロでした。ホッ。普通の10は旅程がずるずる遅れた分とかが影響したのかも。バスについては37枚中26人が「悪い」。なにしろ座席壊れちゃったからなー(笑)。

明日前泊で明後日から同じコース、またアルザス人42人で2回戦目です。日本酒飲んでるヒマもないや。(2007年10月22日)

地獄の三人組に遭遇

ガイドの商売をやっているといろいろなタイプのお客さまに出会います。今回は私の体験した中でもかなりユニークな部類に入るお三方が。マイクを持ってバスの中で説明していても、ご自分たちの話に夢中。こち

らが説明終わると、「今何を話したの？」と(笑)。ご注意申し上げてもまったく変わりなく、マイペース。バスを降りたとたん、「これからどこに行くの?」「集合時間は?」。バスの最前列にお座りで、つねに話しかけてこられるので、なかなかことが進みません。方向感覚はいちおうあるのですが、つねに話をしているので、グループ本隊からはどんどん遅れてしまう。もちろん自己主張は強いので、注文とかお小言ばかり頂戴するのですが、それを聞いていると、ほかのことができなくなってしまう。うーん、試練ですね。もともとフランス人の観光客はまとまりがないほうらしいのですが、それとはまた一味違う、豪快なハズレ方でした。

ツアーが始まってしばらくして、ほかのお客さまから「どう、大変でしょ?」と声をかけられました。「何がですか」と答えると、にやとして「あの《trio infernal》さ。」「地獄のトリオ」ってことですね(笑)。ほかのフランス人のお客さまから見ても変わっているということがわかって一安心。ま、終わってみれば憎めない3人ではありました。

……実際にはもっと強烈な毒があったけど、文章にしただけで済ませました(笑)。左のおばさまを「魔女マダム」、真ん中のおじさまを「小悪魔」、右側のおじさまを「ねずみ小僧」と心の中で密かに呼んでおりました。たとえば「小悪魔」さんは、鼻をかんだティッシュとか、チューインガムのカスとかをそのまま、バスの座席の網に直接入れておられ(ビニールのゴミ袋もあるのに)、ドライバーさんが激怒しておりました。



(2007年11月3日)

アルザスお国自慢

自分のネタがなくなってくるとお客さまのことを、いろいろ聞いちゃう。勉強にもなるし、一石二鳥です。この手でタヒチに行かずにタヒチ通になりました。で、アルザス編はというと。

アルザス出身で最も有名な人は?

アルベルト・シュバイツァー Albert Schweitzer。ふーん、知らなかった。それから前に書いた彫刻家のバルトルディ、レーザー光の研究開発で1966年にノーベル物理学賞を受賞したアルフレッド・カストレル

Alfred Kastler。おしどり火山学者として知られ、1991年に雲仙岳の調査中に火砕流で亡くなったクラフト夫妻 Katia et Maurice Krafft。

クラフト夫妻のことはフランス人なら知っている人が多いです。箱根なんか行って火山の話のついでに触れたりすると、「そーいえば」ってうなずく感じ。アルザス出身とは知らなかったけど。

コウノトリもアルザス名物ですね。

アルザスの食べ物ではもちろん、シュークルート《choucroute》(英語のザワークラウトですね)。それからクグロフ《kouglof》という菓子。フォアグラは、ペリゴール地方と並ぶ名産地。チーズではマンステール《munster》とか。あと耳で聞いただけで不確かだけど「スパツチカパイユ」というのもあるよ、と言ってた。何のことだか忘れちゃったんで、どなたかご存じの方は教えてください。

アルザス地方で有名な3つ星レストランが「オーベルジュ・ド・リル」l'Auberge de l'IIIです。ここは父から子へと何世代も受け継がれてきた老舗で、現在のシェフはマーク・エベルラン。彼の名も、食いしん坊の間では知られているらしいです。「日本にも最近店を出したんだよ」と言われて調べてみたら、名古屋のミッドランドスクエア内、42階でした。ディナーコースが8,400円～。一度は食べに行ってみたい～。[その後、東京にも出店]

(2007年11月4日)

Mizumizu アルザスを旅した時に、どうしても寄りたくて、シュバイツァー博士の生まれた村、Kaysersberg に行ったことがあります。生家が今はmusée になっています。あ～、そうそう、アルザスのフォワグラも最高ですね!

日本料理の魅力は

料理研究家の土井善晴先生にインタビューしました(って、自分が質問したわけじゃなくて通訳しただけ・笑)。お父上は年配の方なら誰でもご存じの土井勝さん。善晴さんは父の後を継いで料理の道に入り、ポール・ボキューズの店や吉兆で修業され、現在はテレビの料理番組や料理本のご執筆など幅広く活躍されています。